

## 草むらの梨の木

暮 秋 至

山あいの小川の土手に子供の胸の辺りまで草むらが茂っている。秋の深まるその草むらのなかに一本の木がフオークのような枝を空にし、立っている。木の大抵の葉は虫が喰い、所々が茶色になつていく。茶と緑がまだらになつた葉に目を凝らして辿つていくと、二つの色が混じり合つて周りの葉と見間違えてしまいそうな小さな実のようなものを付けている。その塊は実というには、見るからに小さくやせている。

少年は、その木が梨であることを知っていた。かれは深い草むらの木に登つて、ツルツと光っているそれにそつと触れてみた。紛れもなく葉ではなく、それは一つの実であった。その実は枝からもがれて少年の手のひらに落ちた。葉にはない梨の實の重みを手にし、かれは木から降りた。梨の木のたつた一つの実は、今、少年の手のひらのなかに

あつた。

一手も入れられないまま、梨の木はそれでも枯れることなく川辺りの草むらに風霜を凌いで何十年か生きて来たのである。その梨の木が枝に一つの小さな実を付けていた。みすばらしい梨の木が一つの実を付けている。が、その貧相な小さな実を見つけて、少年は自身の気持ちがあひそかに高鳴るのを感じていた。かれは、半信半疑に木に登り、目にしたその実をもいだ。

黄銅色に丸々と太つたみずみずしい梨……そんな梨からはほど遠い、葉と見間違えそうなその青い実は少年を裏切るはずであった。梨の實とは名ばかりの別の何かとして。

かれは手に握るそれをおそろおそろかじつてみた。すっぱさが口にひろがる……梨の味がした。紛れもなく梨の味であつた。ほとんど野生に返つた梨の木が枝に付けた、た

つた一つの青いピンポン玉のような小さな実、それは梨に  
ちがいがなかった。

その日から幾星霜歳月が流れる。梨の木はもう無い。そ  
れはすでに遠い少年の日の憶い出である。が、蘇るその小  
さな憶い出に、かれはいまなお自身のうちに湧き上がるあ  
る宝物に似たよろこびを感じるのである。